わが校の紹介

ふるさと教育の根幹に千年の大桜がある

養父市立口大屋小学校
校長　河原宏明

四月九日、国指定の特別天然記念物に指定されている樽見の大桜見学に全校生で出かけました。急な上り坂を登ると、鮮やかな桜の花が目に飛び込んできます。

樹齢約千年のエドヒガン桜、通称「仙桜」とも呼ばれています。

平成九年、弱りかけている大桜の若返り工事を機に、口大屋小学校でも大桜の保存と大桜の二世を育てようと「総合的な学習の時間」を中心に取り組みを始めました。県立森林緑化センター、樽見大桜保存会の協力を得て、樹木医宮田さんの指導の下、大桜の種採り、種まき、若木の育成、そして、里山への定植と一連の作業を子どもたちで行ってきました。

樽見の大桜を見学する児童

校庭にも植えられた大桜二世とともに、「ふるさとを愛し、自ら学び、自ら歩む口大屋っ子の育成」を教育目標に据え、こころ豊かな子どもの育成に取り組んでいます。

校歌にも歌い継がれてきた大桜、ふるさとを愛する心は自分たちの取り組みを通して本物になると確信しています。

閉校まで一年あまり、口大屋小学校がなくなるのは寂しい限りですが、大桜に負けぬ大地にしっかりと根をはった子どもに育てていきます。

窓　寝る子は育つ

朝から「眠い、アクビが出る、頭がぼんやりする」が60％という小学校高学年の調査結果があります。その原因は、「夜ふかしにある」と言われる先生。エンジンがかかるのは給食を食べ終った頃、午後にならないと元気いっぱいの活動が見られない。さらに、朝のあいさつもできない。返事もできない。時に忘れ物もすると。「夜ふかし」は、それほど生活リズムをこわすものです。早く寝ると朝早く目覚めます。

明るいあいさつができ、体全体が活動的となり、頭の回転も良くなります。早く寝ることを家風のひとつに加え、健康な生活を享受してはと思います。

「早起きは、三文の徳」「寝る子は育つ」という言い古された言葉の重みを改めてかみしめたいものです。

◆教育の原点は家庭にあるといい、しつけこそ、家庭で育むことが大切であると言われています。

三つの「しつけ」の基本原則―「あいさつ、返事、後始末」の徹底を望みます。

（学校教育課）

まちの文化財⑤

～平家が城跡～

大屋川の源流は、横行渓谷にそって氷ノ山まで続いています。この横行集落からさらに2・8キロほど林道を入った所に、平家が城跡休息所があります。

この休息所から見て東側にある岩盤の丘が平家が城で、比高差は60メートルほどあります。頂上は最大幅15メートルほどの平坦な岩盤で、南側に向かって高さ8メートルの岩盤がせり出しています。ここが城の中心部です。

城跡の後ろ側は、幅8メートルの堀切で尾根から切り離し、堀切の端は竪堀に続きます。竪堀の西端は休息所の前の渓流に合流し、東端は一の堀の滝に合流します。一つの曲輪を一つの堀切で守る簡素なものです。

横行の小林寿万雄さんは、「平家が城から1・2キロくだった所に、みてが城があります。ここに見張りをおき、旗を立てていました。その旗が倒れると敵の源氏が攻めてきた合図です。味方の不注意で旗がたおれました。平家が城にいたお姫様は、敵に攻められたと思い、城の下を流れる川に身をなげました。ここを姫が淵と呼びます」と現地で解説しました。

平家が城は自然地形の可能性も残りますが、天正5年頃の山城の特徴を備えています。また、みてが城にも登りましたが城郭遺構は発見できませんでした。

この後、平家の家名を後世に伝えるために6人の侍が横行に住んだと言われています。この場所が六軒屋敷と呼ばれています。但馬には35か所に平家の落人伝説があります。しかし平家の落人にかかわる城跡が伝わるのは大屋町横行だけなのです。

秋の紅葉の季節に、ぜひ平家が城跡休息所に立ち寄ってみてください。

（社会教育課）